

切韻における蒸職韻と之韻の音価

平 山 久 雄

一 唇音拗音における反切上字―歸字の類相関

周法高氏は、その論文「三等韵重唇音反切上字研究」⁽¹⁾において、切韻系韻書の唇音をあらわす反切上字の用法につき、次のような現象を指摘した。以下は、同論文 385頁からの、やや自由な要約である。

切韻方言における唇音拗音音節を、その含む主母音に従つて次の三類に分ける。

- A 類 主母音 *a, o, u*
- B 類 主母音 *a, o*
- C 類 主母音 *a, o, u*

A類とB類とはいわゆる重紐を形成し、韻図でA類字は四等欄に、B類字は三等欄に置かれている。⁽⁴⁾ C類字は三等欄に置かれるが、対立する四等字をもたない。A類とB類の声母がのちまで「重唇音」(両唇破裂音)の性質を保つ

さて、右の分類によつて調べると、A類字とB類字は互に反切上字となることがない。つまり、A類反切⁽⁵⁾にB類上字⁽⁶⁾は使われず、B類反切にA類上字は使われていない。これに対しC類上字は、A・B・C各類の反切に使われている。A類上字の中「匹」(質韻滂母)だけは例外であり、C類上字と同じく各類の反切に使われている。(要約おわり)

ところで、これに附言すべき現象として次のことがある。A類上字・B類上字は、いずれもC類反切に使われることがない。これらの上字は結局、それと同じ類の反切にしか用いられないのである。この点について、周氏も別の箇所⁽⁸⁾で触れている。

A 類 主母音/a, e/ 声母に口蓋化要素/ɲ/を含む。

上字	A (除「匹」)			
	「匹」	C	B	婦字
A	○	○	×	○
B	○	○	○	×
C	○	○	×	×

本稿でわれわれが考察の基礎に用いようとする三根谷徹氏の音韻論的解釈に¹⁰⁾翻訳すると、三類の定義は次のように替わる。

B 類 主母音 /a, e/ 声母 /j-/ を含まない。

C 類 主母音 /a, ʌ/

二 蒸職韻の音価(唇音)

蒸職韻⁽¹¹⁾は周氏によつてB類 *·iēŋ, ·iək* とされているが、三根谷氏の体系では /-iaŋ, -iak/ の位置を占め、C類に入ることとなつてしまふ。三根谷氏の音価は Karlgren 氏の推定音 *·iēŋ, ·iək*⁽¹²⁾ に音韻論的解釈を施したものである。周氏の音価は Karlgren 説に対する Paul Nagel 氏の修正説⁽¹³⁾を用いたものであり、この修正は、蒸職韻に軽唇音化の起らなかつた点を説明するためになされたのである。趙元任氏もやはりこの点を説明するため、蒸職韻を *·iēŋ, ·iək* と修正しうる余地を指摘しながらも、それを支持する積極的な根拠が他にないのを弱点として、つよく主張しなかつた。⁽¹⁴⁾ 三根谷氏が、奥舌主母音を含む拗音韻の中で蒸職韻にだけ軽唇音化が起らなかつた理由につき、「本稿は最後まで例外的現象として、説明しえない」と述べられたのは、趙氏の慎重な態度を承けられたものであろう。⁽¹⁵⁾

ところで、表一にあらわれた類相関は、蒸職韻の主母音を前舌母音に修正する説に、積極的な根拠を提供する。完本王韻⁽¹⁷⁾の蒸職韻唇音反切六例の中、四例までがB類上字をとり、二例がC類上字をとる。⁽¹⁸⁾ したがつて、蒸職韻唇音音節は反切上でB類の特性を有すると判断される。なお、蒸職韻唇音字自身が反切上字に使われた用例はない。ひるがえつて、表一の類相関の成り立つ理由を考えると、それは次の如くであらう。A・B・C三類の音韻的な

性質の違いに應じて、声母の音声的な特徴は異なっており、その違いは殊に口蓋化に関しはつきりとあらわれていると思われる。すなわち、／ɣ／を含むA類声母は音声上もつよい口蓋化を伴ない、／ɣ／を含まないB類声母は音声上口蓋化を伴わず（或は軽度の口蓋化しか伴わず）、／ɣ／の有無による対立のないC類声母は、音声上口蓋化については両者の中間的なニュアンスをもつていた、と推論する。¹⁹⁾これにもとづいて考えるならば、A類字とB類字は声母の音声的特徴が著しく隔たつていたため、互に反切上字となり合うことができなかったのだ、と説明される。一方C類字はその声母がA類字・B類字の中間的な音声的特徴を有したので、そのどちらをあらわす反切上字としても使われることができたのである。²⁰⁾

右の考察にしたがえば、蒸職韻唇音が反切上B類の特性を示すのは、声母がB類の音声的特徴を有したために他ならない。B類声母一般の音声的特徴は、その音韻的環境、すなわち主母音が前舌母音で声母自身が／ɣ／を含まないという条件の下で、はじめて生じていたものである。ゆえに、蒸職韻唇音の主母音は／ɣ／ではなく／e／の**はず**であり、全体の韻形は／ɣɛŋ, ɪek／(B類)でなければならぬのである。音価を／ɪɛŋ, ɪak／としたまま、その声母にB類と同じ音声的特徴があらわれていた理由を、音声学的に説明するのは困難であろう。

三根谷氏の韻母表で、／ɣɛŋ, ɪek／の位置はすでに清昔韻により占められている。しかし清昔韻はA類しか含まず、蒸職韻はB類しか含まないから、両者は補い合う分布をなして、互に衝突しないのである。

三 牙喉音拗音における反切上字——**帰字**の類相関

周法高氏によつて言及されていないが、牙喉音⁽²¹⁾拗音音節を唇音と同じ基準によりA・B・C三類に分けると、表一と全く同じ類相関が上字―婦字の間に見出される。この際⁽²²⁾の分類において、蒸職韻開口はC類に、職韻合口はB類に、また之韻はC類に加えなければならない。これらについては後に詳述する。

表一の相関が牙喉音でも成り立つのを実証するため、完本王韻の牙喉音拗音反切におけるA類上字・B類上字の用例をすべて掲げ、ㇿ字の類別を併せ記すことにしよう。反切のㇿ字を掲げるのは省略する。

表二

見	見	見	影	影	影	群	溪	溪	溪	見	見	聲母
几影	几律	几利	伊入	伊謬	伊昔	葵癸	詰利	傾雪	窺瑞	吉掾	癸悻	反切
脂上開B	脂上開B	脂上開B	脂平開A	脂平開A	脂平開A	脂平合A	質入開A	清平合A	支平合A	質入開A	脂上合A	上字韻母・類 ⁽²³⁾
庚上開B	質入合B	脂去開B	緝入A	幽去A	昔入開A	脂上合A	脂去開A	薛入合A	支去合A	仙去合A	脂去合A	歸字韻母・類 ⁽²³⁾
疑	群	群	群	群	群	群	溪	溪	溪	見	見	見
宜寄	暨軌	暨几	達位	奇逆	奇驕	奇寄	綺兢	綺戟	綺映	軌位	詭偽	几劇
支平開B	脂去開B	脂去開B	脂平合B	支平開B	支平開B	支平開B	支上開B	支上開B	支上開B	脂上合B	支上合B	脂上開B
支去開B	脂上合B	脂上開B	脂去合B	陌入開B	宵平B	支去開B	蒸平開C	陌入開B	庚去開B	脂去合B	支去合B	陌入開B

匣	曉	曉	曉	曉	影	影	影	影	影	疑	疑	疑	疑
為委	義錦	義乙	義義	英廉	英及	乙百	乙劣	乙利	危賜	宜禁	宜戟	宜引	
支平合 B	支平開 B	支平開 B	支平開 B	庚平開 B	庚平開 B	質入開 B	質入開 B	質入開 B	支平合 B	支平開 B	支平開 B	支平開 B	
支上合 B	侵上 B	質入開 B	支去開 B	鹽平 B	緝入 B	陌入合 B	薛入合 B	脂去開 B	支去合 B	侵去 B	陌入開 B	真上開 B	
<hr/>													
匣	匣	匣	匣	匣	匣	匣	匣	匣	匣	匣	匣	匣	匣
永兵	采遍	采丙	采美	采偽	筠輒	洵冀	洵悲	蓮支	為立	為柄	為据	為劇	
庚上合 B	庚平合 B	庚平合 B	庚平合 B	庚平合 B	真平合 B	脂上合 B	脂上合 B	支上合 B	支平合 B	支平合 B	支平合 B	支平合 B	
庚平合 B	職入合 B	庚上合 B	脂上合 B	支去合 B	葉入 B	脂去合 B	脂平合 B	支平合 B	緝入 B	庚去合 B	真去合 B	祭去合 B	

右掲以外の牙喉音拗音反切では、すべて C 類上字が使われている。⁽²⁴⁾

右掲反切の中、上字が B 類であるに拘らず帰字が C 類で、上字―帰字の類一致への唯一の例外をなしている反切「綺兢」(帰字「硯」)は、完本王韻等では韻末に近く置かれ、「十韻彙編」所収の残巻の中「切三」⁽²⁵⁾には見当らない。故に、これは原本切韻にはなかった増加反切とみなして、本稿の考察対象から除外することができる。⁽²⁶⁾

牙喉音についても表一と同じ類相関が上字―帰字の間に成り立つ⁽²⁷⁾のは、口蓋化を中心とする声母の音声的特徴に關し、唇音の場合と平行的な差異が牙喉音 A・B・C 三類の間にあつたのに由ると考えられる。

四 蒸職韻の音価（唇音以外）

四、一 牙 喉 音 開 口

右に述べた増加反切一例を除き、蒸職韻牙喉音開口反切にはすべてC類上字が使われ、A類上字・B類上字は一つも使われていない。しかし、これだけによつて蒸職韻牙喉音開口をC類と判定するには、未だ多少の不安がある。なぜならば、牙喉音の場合、A類反切・B類反切に各A類上字・B類上字の使われる比率は、唇音の場合に比べ全般的にかなり低いのであるから、蒸職韻牙喉音開口反切にそれらが現れないのは、或は単なる偶然にすぎないかも知れぬからである。そこで、更に反切上字としての蒸職韻牙喉音開口字の用例を完本王韻につき調べると、次表となる。

表 三

(1)	(2)	声 母		反 切		婦字韻母・類			
		曉	曉	興倚	興倚	支上開B	支上開B	(3)	(4)
		曉	曉	興近	興近	欣上開C	欣上開C	影	影
								憶俱	憶俱
								應儉	應儉
								應尸	應尸
								鹽上B	鹽上B
								巖上C	巖上C

右掲反切の中、(1)(2)は「切三」になく、増加反切と認められる。これらを除外すると残り三例だけとなるが、その中二例の婦字がC類であることにより、蒸職韻牙喉音開口がC類であつたのは明らかといつてよい。牙喉音の場合、A類上字・B類上字がC類反切に使われた例は増加反切以外まづたくなないのであるから、僅か二例であつてもそれらの存在は重視すべきである。

蒸職韻牙喉音開口がC類であつたことよりみて、それらの韻母は三根谷氏の解釈と同じ音価 /-aŋ, -iak/ を有し

たと結論される。

四、二 牙 喉 音 合 口

蒸韻には合口がなく、職韻は牙喉音の曉・匣両母の下でのみ合口がある。職韻牙喉音合口字が反切上字として使われた用例はないが、職韻合口匣母反切にB類上字「榮」⁽²⁹⁾があらわれることにより、職韻合口牙喉音はB類であつたのが知られる。したがつてその韻母の音価は、開口の場合とは主母音が異なり、*／iɛk／*であつたと結論される。三根谷氏の韻母表で*／iɛk／*の位置は昔韻合口により占められているが、昔韻牙喉音合口はA類しか含まず、職韻牙喉音合口はB類しか含まないから、両者が衝突することはないのである。

四、三 舌 齒 音 開 口

舌齒音⁽³⁰⁾声母の下では、前舌主母音を含む音節には唇牙喉音の場合のA類とB類にあたる区別がない。舌齒音拗音音節で前舌主母音を含むものをAB類と呼び、奥舌主母音を含むものをC類と呼ぼう。AB類とC類の間には、反切上とくに相関と称しうる関係は見出しえない。完本王韻など切韻系韻書の反切において、AB類反切・C類反切いずれも、AB類上字・C類上字の双方を、殆ど差別なく自由にとつているのである。⁽³¹⁾したがつて、上字一帰字の類相関を利用して主母音の前舌・奥舌を決定することが、舌齒音の場合には不可能である。

しかしながら、蒸職韻舌齒音開口の韻母をもし*／ɛɣ, iɛɣ, iɛp／*とすれば、A類・B類の違いによる補い合う分布がこれ場合ないのであるから、それらは清昔韻開口と衝突することになってしまう。それらの音価が*／iɛɣ, iɛk／*でなければならぬことは、類相関の援けを藉りることができずとも、この点からすでに明らかであるといつてよい。^(補註)

但し、舌歯音声母の中でも清昔韻開口がそれとの結合を欠いている正歯音二等声母の場合には、蒸職韻開口は /-ieŋ, -iek/ でもありえたわけである。事実、職韻幫母反切「彼側」において莊母字「側」が下字となつてゐることは、この可能性を強めるのである（次章参照）。ただ、莊母入声におけるこれ一つの根拠によつて、すべての正歯音二等声母の下で一律に同様の音価を指定するには若干の不安があるが、本稿では一応、正歯音二等の場合の音価は /-ieŋ, -iek/ であつたと見なしておきたい。

五 蒸職韻音価のまとめ、

および音価と反切下字との関連

表 四

声 母		開 合	
唇	音	開	合
正 歯 音 二 等			
舌 歯 音 (除正歯音二等)		/ -ieŋ, -iek /	/ -iuek /
牙 喉 音			

これまでの推定を総括すると、切韻方言における蒸職韻の音価は、声母と開・合を条件として、主母音 /e/ を含む場合と主母音 /a/ を含む場合とがあり、その分布は上表の如くであつた。

主母音の異なる韻母が一つの韻に包括されるというのは、切韻の韻組織において他に同様の例を見ない。かかる異例が生れえた理由は次のように説明される。上表 /-ieŋ, -iek, -iuek/ と結合する声母は唇牙喉

音B類と正歯音二等であり、これらはいずれも、非口蓋性あるいはそり舌性のゆえに、後に来る主母音／ə／を音声的に中舌化する力があつたと考えられる。加えて奥舌性の韻尾／ɯ、ɤ／も同様の力をもつたはずであり、声母・韻尾の両方から中舌化の力が働いた結果、これら韻母における主母音／ə／は、音声的には／-i.ŋ, -i.k/における／ɤ／の実現とあまり変らない中舌性の母音として実現されていた、と考えうる。つまり、蒸職韻唇牙喉音では、主母音／ə／の存在は、音声上は主母音そのものの前舌性よりもむしろ、声母の含むB類的特徴の上にあらわれていた、と推論しうる。このような音声的状况を仮定して考えるならば、表四における主母音の異なる諸韻母が、押韻上一つの韻にまとめられた理由がうなずかれるであらう。⁽³²⁾

一方、蒸職韻に含まれる諸韻母における／ə／と／ɤ／の違いは、音声的に主母音そのものの違いとして全くあらわれなかつたのではない。音声的に主母音そのものにも何ほどか差異の存したことが、以下に述べるように、反切下字の用法にかなり反映しているのである。

まず唇音の場合についてみると、蒸職韻唇音反切は同じ唇音の下字をとろうとする傾向が認められる。次表は、完本王韻に含まれる蒸職韻唇音反切のすべてである。

表五

	声母	反切	歸字	上字韻母・類		下字 声母	歸字韻母				
				幫	筆陵	冰	質入B	來	蒸平	幫	蒸平
(1)	並	扶氷	憑	虞平C	幫	蒸平					
(2)	並	扶氷	憑	虞平C	幫	蒸平					
(3)	並	皮孕	甕	支平B	羊	蒸去					
(4)				幫	彼側	遍	支上B	莊	職入		
(5)				滂	芳逼	堀	陽平C	幫	職入		
(6)				並	皮逼	懷	支平B	幫	職入		

切韻における蒸職韻と之韻の音価

平山

右表の反切の中、唇音下字をとるのは(2)(5)(6)の三例であるが、唇音下字をとらない反切の中まず(4)については、幫母以外の職韻唇音字はみな比較的隠僻で反切下字として適当でなかったため、正齒音二等莊母字が下字に選ばれたのだ、と理解しうる。職韻開口反切の下字としてひろく使われている来母字「力」を排して、他に全く用例のない莊母字「側」を用いたのは、⁽³³⁾「力」の韻母が /iak/ であつたのに対し「側」の韻母が /iek/ であつたためだ、と仮定してはじめて説明しうるであらう。(3)については、去声では他に唇音字や正齒音二等字が全くないのであるから、主母音の異なる「孕」を用いざるをえなかつたのである。(1)については、並母字「憑」を用いればよいかに思われるが、去声字「憑」と字義字形ともに紛わしくかつ多画なので避けられた、との説明も可能であらう。注意すべきは、歸字と主母音の異なる反切下字を用いた反切(1)(3)は上字がいずれもB類となつてゐることで、反切を唱える際に、下字主母音 /a/ によつて歸字声母にC類的音声特徴が附与されるのを、B類上字を用いることで防いでゐるのだ、と解される。⁽³⁴⁾

牙喉音合口の場合についてみると、職韻の二反切はいずれも唇音字「逼」を下字にとり、主母音 /ə/ の措定を裏付けてゐる。職韻牙喉音合口の韻母がもし /eik/ であるならば、これら二反切は曉母字「漚」、匣母字「域」を互に下字にとり、合えばよいのであるから、主母音の違いをおして唇音下字をとる必要はないのである。

正齒音二等の場合についてみると、まず職韻開口反切は均しく来母字「力」を下字としてゐる。正齒音二等声母のそり舌性によつて、/iek/ の主母音は、唇音声母の場合よりも更に中舌的な音声としてあらわれ、/iak/ の主母音と特に近接した印象を与えたのであらう。蒸韻開口反切(実例は平声生母の一例のみ)が牙喉音見母開口字「矜」を

下字にとつてゐるのも、同様に理解されるであらう。

舌齒音（正齒音二等を除く）開口・牙喉音開口の場合をみると、これらをあらわす反切は反切下字について一グループをなし、多く共通の下字（平声「陵」、去声「證」、入声「力」、など）をとり、主母音が共通であつたことを裏付けてゐる。そして、主母音／ə／を含むと推定した韻母を有する字は、これらの反切には一つも下字としてあらわれないのである。⁽³⁶⁾

以上見たところを要するに、蒸職韻に包括される／ə／韻母と／ɤ／韻母とは、反切下字の上でも區別してあらわされるのが原則であり、適当な下字が他にない場合、および音声上とくに近接した場合にかぎつて、／ə／韻母を／ɤ／韻母であらわすことが許容されている。これは両韻母の間に、相互の押韻上の調和感を妨げない程度において、主母音の音声的差異が何ほどか存したことの反映として、はじめて理解することができるであらう。

六 之韻の音価

之韻牙喉音反切は、すべてC類上字をとつてゐる。反切上字としての之韻牙喉音字は、次表に見られるようにA・B・C各類の反切に用いられる。これらより見て、之韻牙喉音がC類に属したのは明らかである。

表 六

声母	反切	帛字韻母・類	見	紀力	職入開C
見	基善	仙上開A	溪	起玉	燭入C
見	紀劣	薛入合B	溪	起法	乏入C

切韻における蒸職韻と之韻の音価 平山

群	其季	脂去合 A
群	其聿	質入合 A
群	其郢	清上開 A
群	其器	脂去開 B
群	其翹	祭去開 B
群	其輦	仙上開 B
群	其立	緝入 B
群	其呂	葉入 B
群	其俱	魚上開 C
群	其矩	虞平合 C
群	其遇	虞上合 C
群		虞去合 C

見	群	群	群	群	群	群	群	群	群
其斤	其謹	其迄	其偃	其謁	其月	其兩	其亮	其虐	其矜
欣平開 C	欣上開 C	迄入開 C	元上開 C	月入開 C	月入合 C	陽上開 C	陽去開 C	葉入開 C	蒸平開 C
									添去 (直音四等)
									紀念

Karlgren氏は、之韻に対して脂韻開口と同一の音価 ai を与えている。⁽³⁶⁾ これは、両者の区別の反映が外国借音・現代諸方言音のいづれにも全く見出されなかつたためであり、この点についての満足すべき解決はその後も提出されてはいない。三根谷氏が、之韻を脂韻開口と同じく ai と解釈されたのは、かかる事情からの已むをえぬ措置であつた。⁽³⁷⁾ しかし今、之韻牙喉音がC類であつたと知ることにより、之韻が音韻論的に奥舌主母音を含むものとして、脂韻開口とは異なる音価を有したことが確定されるのである。

之韻の含む奥舌主母音としては、止摂を構成する韻の一つとして、 a よりも a を擬するのがふさわしい。ところが三根谷氏の韻母表では、主母音 a の拗音開口に該当する欄はすでにみな塞がつており、之韻が入るべ

き余地はない。拗音にあらわれない主母音 /a/ を例外的に用いて、之韻を /ai/ と解釈する案、或は微韻開口 /i:/ を /ai/ に移してその後に之韻を入れる案が一応考えられるが、/a/ は直音では /a/ とともに二等韻の主母音として、結合する声母の選択にあたり口蓋的な性質を示すものであるから、奥舌主母音 /ɤ/ の代替としてそれを用いるのは適当でない。このような事情からわれわれは、韻尾に立つ音素としてあたらしく /ɛ/ を仮定し、それによつて之韻を /i:ɛ/ と解釈したい。切韻方言の韻尾体系の中で /ɛ/ は次表の如き位置に収まることができるものであるから、その仮定は決して不自然ではない。

表	i	ɛ	u	/
七	u	u	u	m
	t	k	nk	p

之韻の上古音は *ɛi:eg* で、その中古音の韻尾 /ɛ/ は上古音の *ɛ* にあたるものといえる。之韻の他にも、上古音で *ɛ* に終つた韻母が、中古音に至る中間的段階で /ɛ/ を有したことがあつたかも知れない。しかしそれらの /ɛ/ は脱落するか /i:/ に変ずるかして、中古音では之韻だけに /ɛ/ が残されたわけである。⁽³⁹⁾ やがて八世紀末の慧琳音義の音韻体系で之韻が他の止摂諸韻と合流するに及び、音素 /ɛ/ は消滅することとなつた。

音声としては、之韻 /i:ɛ/ は大略「*ɛi:ɛ*」の如くであつたと考ええる。或は殆ど「*ɛ*」であつたかも知れない。すなわち、/ɛ/ は介音 /i:/ の同化を蒙り調音点を大きく前進させて「*ɛ*」となつていた。主母音 /ɤ/ は介音・韻尾の双方から同化と吸収を受け微かな「*e*」音としてあらわれるか、或は全く音声面にあらわれなかつた、と

考える。之韻にこのような音声を仮定するとき、脂韻開口 /-iei/ [-i] や微韻開口 /-iui/ [-i] との間に、押韻上また音韻上の混乱がとくに生じ易かつた点も、説明しうるであろう。なお、之韻の韻尾 [-i] は微韻の韻尾 [-i] に比べ、舌面のより鈍感な部分で調音されるために、/v/ に該当する [-e] 音との間に調音上の明瞭な区切りをつけにくく、そのため [-e] 音を吸収する程度が [-i] において一層大きかつたのだ、と考える。

[-e] 類の音を主母音に擬する点で右述の推定と実質的に似た説はすでに提出されている。陸志韋氏は之韻を (i) (e) (i) (v) と表記している。(e) は「o から変化した弱母音」、(v) は切韻時代にはこのように単母音化していた可能性をあらわす。また李栄氏⁽⁴¹⁾は之韻を e と推定している。しかし両氏の説の主たる根拠は、之韻の上古音が i: e: で e を含んでいたのにもとづく。時代の甚だしく異なる上古音のみに頼つてこのような推定を下すのは危険であり、じじつ両氏ともに、他に推定の手がかりがないための方便として上古音を用いているのである。われわれの説がこれらと異なる点は、切韻音推定の根本資料である切韻系韻書の反切そのものの内部に、推定の鍵を見出したことにある。

七 敦煌毛詩音反切よりみた蒸職韻と之韻の音価

右に述べた蒸職韻と之韻の音価は、敦煌發見の毛詩音残卷の反切からも裏付けることができる。

毛詩音残卷の主要なものとして S. 2729, P. 3383 の二種がある。S. 残卷の反切が反映する音韻体系の年代は七世紀後半ごろ、P. 残卷のそれは八世紀前半ごろと考えられ、そのいずれにおいても、切韻方言の音韻体系が慧琳音義

におけるような著しい改変を経ずに比較的よく保存されている。これら残巻の反切はとくに上字の選び方に特色がある。本稿の論題と関係ある面についてだけいうと、唇牙喉音におけるA・B・C三類の区別に関し、上字は帰字と類が同じであるように選ばれている。つまり、A類反切にはA類上字、B類反切にはB類上字、C類反切にはC類上字が、それぞれ原則として使われており、少数の例外的反切を除き、A類反切・B類反切にC類上字は使われないのである。かかる上字―帰字の類一致原則を利用して調べると、蒸職韻と之韻の属する類について、一層直截明確な判定を下すことが可能である。そしてその判定結果は、切韻系韻書の反切についてさきに見たところと非常によく合致するのであり、われわれのさきの判定が誤まつていないことを、保証するのである。

ただ、敦煌毛詩音反切からの知見が切韻系韻書反切からの知見と一致しない点として、次のことがある。敦煌毛詩音反切では、蒸職韻牙喉音開口反切にB類上字を用いたものと、C類上字を用いたものがあり、面白いことにこれらは反切下字においても区別がある。すなわち、B類上字を用いた反切では唇音字や正齒音二等字が下字となっており、C類上字を用いた反切では来母字が下字となつてゐる。したがつて、蒸職韻牙喉音開口には /-ieŋ, -iek/ と、 /-iaŋ, -iak/ 両様の韻母があらわれるようになっていた、と推定される。両者の分布についての音韻的条件は見出されず、同じ声母の下に両様の反切があらわれることもある。両者の併在は /-iaŋ, -iak/ > /-ieŋ, -iek/ の一種の過渡的状況⁽⁴²⁾の反映と解される。慧琳音義の音韻体系ではC類韻母の多くがB類韻母に合流しているが、対立するB類韻母のない蒸職韻牙喉音開口において、この方向の変化がはやくから起つたのであろう。このように切韻方言と一致しない点についても、切韻方言に関するわれわれの推定を出発点として、音韻史的な説明を加えう

るのであり、われわれの推定の妥当さはこのような面からも保証されるといえよう。なお、完本王韻において蒸職韻牙喉音開口反切にB類上字を用いた唯一の反切「綺兢」は、すでに述べた如く増加反切であるが、これも上記の変化を反映するものとして理解することができる⁽⁴⁴⁾。

本章に述べたことがらは、敦煌毛詩音反切についての専論に詳述するので、細かいデータの引用など一切省略して、いま梗概だけを記した。

八 上古音との対応よりみた蒸職韻（唇音および牙喉音合口）の音価

蒸職韻の音価の中、唇音および牙喉音合口の場合については、主母音を／ə／とする推定の妥当さが上古音との対応からも傍証される。

蒸韻は上古音の蒸部に由来し、職韻は之部入声に由来する。これら両部はə類の主母音を含んでいたと推定されるが、他にə類の主母音を含んでいた上古の部として次の諸部がある。⁽⁴⁶⁾

之陰 微陰 微入 文 幽陰 幽入 中 緝入 侵

これら諸部に含まれる拗音韻母が、唇音声母の下で中古音（切韻音）のどのような韻母に対応するかを調べると、表八ノ一となる。⁽⁴⁷⁾ そこから看取されるのは、これら諸部には、幽入・中・緝入を除き、それぞれ二つづつの拗音韻母が存在し、一方は中古音で主母音／ə／B類の韻母に対応し、一方は主母音／ɤ／C類の韻母に対応していることである。之入・蒸の両部について同様のことを調べたのが表八ノ二であるが、従前の説の如く蒸職韻唇音の主母

音を／＼／と見るならば、これら兩部に含まれる各二つの拗音韻母は、中古音でどちらもC類に対応することとなつてしまう。これに対し、蒸職韻唇音の主母音を／ə／と見るならば、表八ノ二に明らかなように、表八ノ一の諸部と見事に平行的な対応が、これら兩部についても認められることになる。

前記の諸部に含まれる拗音合口韻母が、牙喉音声母の下で中古音のどのような韻母に対応するかを調べると、表九ノ一となる。但し、幽^陰・幽入・中・緝入・侵の各部は合口韻母を含まないのでこの表にはあらわれない。表九ノ一の諸部についても、中古音で主母音／ə／B類に対応する韻母と主母音／ɤ／C類に対応する韻母とが、一つの部に含まれて併在していることが看取される。之入・蒸の兩部について同様のことを調べたのが表九ノ二であるか⁽¹⁴⁸⁾、職韻牙喉音合口の主母音をわれわれの如く／e／と見るならば、表九ノ一の諸部と平行的な対応が、之入部についても浮び上つてくるのである。

右記以外の場合の蒸職韻の音価については、主母音に／ə／ɤ／のいずれを擬するのがより妥当であるのか、上古音との対応からは右述の如き明瞭な答を引き出すことがむずかしい。ə類主母音を含む他の諸部の対応が、右述の場合の如き一致した状況を示さないからである。これらの具体的状況についての記述は省略する。

(北海道大学講師)

表八ノ一

之 陰				幽 陰				侵			
上				上				上			
古	ɿwəg		ɿwəg	古	ɿəug		ɿəug	古	ɿəm		ɿwəm
中	脂 B		尤 C	中	幽 B		尤 C	中	侵 B		東 C
古	/iei/		/iau/	古	/ieu/		/iau/	古	/iem/		/iaun/
微 陰				幽 入							
上				上							
古	ɿwəd		ɿwəd	古	/ /		ɿəuk				
中	脂 B		微 C	中	/ /		屋 C				
古	/iei/		/iuai/	古	/ /		/iauk/				
微 入				中							
上				上							
古	ɿwət		ɿwət	古	/ /		ɿəun				
中	質 B		物 C	中	/ /		東 C				
古	/iet/		/iuat/	古	/ /		/iaun/				
文				緝 入							
上				上							
古	ɿwən		ɿwən	古	ɿəp		/ /				
中	真 B		文 C	中	緝 B		/ /				
古	/ien/		/iuən/	古	/iep/		/ /				

之 入			
上			
古	ɿwək		ɿwək
中	職 B		屋 C
古	/iek/		/iauk/
蒸			
上			
古	ɿwən		ɿwək
中	蒸 B		東 C
古	/ien/		/iaun/

表八ノ二

表九ノ一

上	之 除		上	文	
古	iwəŋ	iwǝŋ	古	iwən	iwǎn
中	脂合 B	尤 C	中	真合 B	文合 C
古	/iuei/	/iau/	古	/iuen/	/iuən/
上	微 陰*		* 微陰にはこの他, iwar > 中古 /iue/ 支合 B がある。		
古	iwəd	iwǝd			
中	脂合 B	微合 C			
古	/iuei/	/iuai/			
上	微 入				
古	iwət	iwǝt			
中	質合 B	物合 C			
古	/iuet/	/iuat/			

表九ノ二

上	之 入	
古	iwək	iwǝk
中	職合 B	屋 C
古	/iuek/	/iuk/
上	蒸	
古		
中		
古		
中	東 C	
古	/iaun/	

〔追補〕 参照の便宜に供するため、三根谷徹氏による切韻韻母体系の表を転載する（「中古漢語の韻母の体系」言語研究三十一号 p.16 より）。* 印を附した韻の音価について、本稿では後述したを試みた。

a 歌	ai 泰	au 豪	am 談	an 寒	an 寒	an 唐	auŋ 冬
ua 歌	uai 泰	—	—	uan 寒	uan 寒	uan 唐	—
(ia 歌)	iei 廢	—	iam 殿	ian 元	ian 元	ian 陽	iauŋ 鍾
(iua 歌)	iuai 廢	—	—	iuon 元	iuon 元	iuon 陽	—
—	ai 哈	au 侯	am 覃	an 痕	an 痕	an 登	auŋ 東
ua 模	uai 灰	—	—	uan 魂	uan 魂	uan 登	—
ia 魚	iai 微	iau 尤	iam 凡	ian 欣	ian 欣	ian 蒸*	iauŋ 東
iua 虞	iuai 微	—	—	iuon 文	iuon 文	iuon 職*	—
u 佳	ui 皆	—	um 咸	un 山	un 山	un 耕	—
ua 佳	uai 皆	—	—	uan 山	uan 山	uan 耕	—
a 麻	ai 夬	au 肴	am 銜	an 刪	an 刪	an 庚	auŋ 江
ua 麻	uai 夬	—	—	uan 刪	uan 刪	uan 庚	—
ia 麻	iai 祭	iau 宵	iam 鹽	ian 仙	ian 仙	ian 庚	—
—	iuai 祭	—	—	iuon 仙	iuon 仙	iuon 庚	—
—	ei 齊	eu 蕭	em 添	en 先	en 先	en 青	—
—	uei 齊	—	—	uen 先	uen 先	uen 青	—
ie 支	iei 脂之*	ieu 幽	iem 侵	ien 真臻	ien 真臻	ien 清	—
iue 支	iuai 脂	—	—	iuon 真	iuon 真	iuon 清	—

註

- (1) 中央研究院歷史語言研究所集刊(以下「集刊」と略)
第二十三本下 1962 pp. 385-407
- (2) 唇音とは、幫 p・滂 p'・並 b・明 m の諸母を指す。
これら術語は、とくにことわる以外、中国音韻学の慣用にしたがう。
- (3) 声母が唇音である拗音(すなわち介音 /i/ を含む)の音節。本稿は以下にも同様の簡略な表現を用いる。
- (4) 幽韻のみは四等欄に置かれるが B 類である。
- (5) 帛字(反切で音をあらわされる字)の音が A 類である反切。以下これに倣う。
- (6) それ自身が B 類の音をもつ上字。以下これに倣う。
- (7) 王仁昫刊謬補缺切韻(唐写本・明宋濂跋・故宫博物院藏)の略称。「宋跋本」「王三」などとも略称される。
- (8) 周氏論文 Ibid. p. 403(註)二の中に「又切韻、积文、玄応音義有 C 類字(輕唇音)用 A 類字作切語上字的現象、但只限於數紐字用『匹』『正』字。」とある。これに関係する挙例は、同論文の本文 pp. 388-9, p. 393, p. 398 の「C 類字用 A 類字作切語上字」の項として見出される。
- (9) 表一から捨象された事項として、直音上字―拗音帛字、拗音上字―直音帛字の組合せによる反切が少数存在する。これらを除き表一の類相関で例外となるのは、本稿が

切韻における蒸職韻と之韻の音価 平山

主な資料とする完本王韻の反切では、ただ 1 例、范韻(凡韻上声)明母 C 類の帛字をあらわす反切に庚韻 B 類の上字「明」が充てられていることのみである。

なお、A 類反切・B 類反切における C 類上字の使用比率は、帛字の声調により異っている。すなわち、平声の A 類反切・B 類反切では C 類上字の使用が殆どを占めるが、去声の場合は非常に僅かしが用いられていない。上声・入声の場合は両者の中間にある。この現象の解釈については別稿で論ずる予定である。

- (10) 三根谷徹「中古漢語の韻母の体系」言語研究 31 1956 pp. 8-21(韻母の解釈について)。本稿 62 頁(追補)参照。

三根谷徹「韻鏡の三・四等について」言語研究 22/23 1953 pp. 56-74(重紐の対立を声母における /j/ の有無に帰することについて)。重紐の音韻論的解釈の問題はなお考えたいが、しばらく三根谷氏に従う。

- (11) 以下、平声の韻目名を挙げて、平・上・去三声の相配する韻を兼ねあらわす。入声韻は別にその韻目名を挙げる。三根谷氏の韻母表(「中古漢語の韻母の体系」Ibid. p. 16)では、入声韻も平声韻目名の下に兼撰されている。

- (12) Bernhard Karlgren: *Etudes sur la phonologie chinoise*, Stockholm 1915—1926 p. 673 華訳本(趙元任等訳「中国音韻学研究」1940) p. 513

- (13) Paul Nagel: Beiträge zur Rekonstruktion der
切韻 Ts'ieh-yün Sprache auf Grund von 陳軌 Ch'en
Li's 切韻考 Ts'ieh-yün-k'au, Young Pao XXXVI 1941
pp. 95-158 p. 137 參照。
- (14) Yuen Ren Chao: Distinctions within Ancient
Chinese, HJAS. 5-3/4 1941 pp. 203-233 pp. 225-226 參
照。
- (15) 「中古漢語の韻母の体系」 ibid. p. 15 (註1)
- (16) その他、舌齒音声母の下で清音韻と衝突することにな
るのも、蒸職韻の主母音を /e/ とされなかつた大きな理
由であろう。本稿は、声母と開合により主母音を /e/ と
/a/ に違えること¹⁾、この衝突を避けようとする。
- (17) 以下本稿では、広韻に比べ多少とも原本切韻の反切の
用字に近いと思われる完本王韻を主な資料として用いる。
完本王韻の反切は、李栄「切韻音系」語言学専刊第四種
北京 1952, 新版重印 1956 の単字音表に整理されて掲げら
れており、本稿ではそれ(重印本の)に拠る。
- (18) 表五参照。「十韻集編」(劉復等編 北京 1936) 所収
の残卷類や広韻について調べてもこの大勢に変化はない。
- (19) C 類声母がのちに軽唇音化を起した理由の一つとし
て、口蓋化を伴なわなかつたことを考えようとする傾向
が、わが国の学界にはつよい。しかしわたくしは、口蓋化
- はむしろ軽唇音化に有利な条件として作用した、と考えて
いる。奥古主母音を条件に軽唇音化が起つた理由として
は、趙元任氏がかつて仮説として述べたように (Distinc-
tions within Ancient Chinese, ibid. p. 224)、奥舌母
音(音学的には趙氏のいう如く中古および奥舌母音)は調
音に際し下あごが後方に引かれるので、その結果として下
唇が上歯と触れ易くなることが挙げられる。軽唇音化が同
時に拗介音を条件として起つた理由について趙元任氏は述
べていないが、拗介音のもたらす声母の口蓋化によつて口
角が左右に引かれるのを通じ、下唇と上歯の接触面が拡げ
られ、摩擦音をそれだけ生じ易くなつたのだ、といえる
であろう。なお、C 類反切の中で、東屋韻(-iau, -iauk/
と尤韻(-iau)の明母反切だけは、一致して例外的に直音
上字「莫」をとっている。この現象は、主母音 /a/ につ
づく円唇的韻尾 -u, -iu, -iuk/ を条件として、C 類明母
がとくに口蓋化を落した音声としてあらわれていた反映と
解される。面白いことに、これらの C 類明母だけでは軽唇
音化が起らなかつたのである。一般の C 類声母がある程度
の口蓋化を含んでいたことが、逆にこれからうかがわれる。
- (20) A 類上字・B 類上字がどちらも C 類反切に用いられな
いのは何故か。それは次の如くであろう。広韻や完本王韻
の反切では、一つの声類をあらわすのに用いられている上

字の数は通常かなり多数に達するけれども、延べ使用数から見るならば、1—数个程度の頻用字によつてその大部分が占められている。これは、一つの声類に対し少数の一定した上字を選んでおいて、帰字におけるさまざまな音韻的条件に係りなく、それらを一貫して用いようとする志向がつよく存在したためと考えられる。A・B・Cどの類の反切にも使うことのできるC類上字は、この志向による選択に叶うものとして、多く用いられているのである。ところで、この志向の上に被さりそれと拮抗するいま一つの志向として、帰字と音韻的構成がなるべく一致するよう上字を選ぼうとする志向があつた、と考えられる。かく上字を選ぶことにより、上字声母の音聲的特徴が帰字のそれに接近するのを通じて、反切を唱え易くするのを意図しているのである。A類反切にA類上字、B類反切にB類上字が使われることがあるのは、この志向のあらわれと解される。これら二つの志向——前者がより基本的なものであるが——の交錯として切韻系韻書の反切上字を捉えるならば、C類反切にA類上字・B類上字の用いられる余地のないことが諒解されよう。

また、A類上字の中「匹」/pʰiet/のみがC類上字と同じ性質を示す理由は次の如くであろう。「匹」の音声では、声母の無声気音と主母音の狭さ、入声の短促さのために、

切韻における蒸職韻と之韻の音価 平山

音節全体が無声化する傾向がつよく、そのためA類としての音聲的特徴が充分明瞭にあらわれなかつたのであろう。因みに、止摂を除いては、滂母の下でA類とB類の対立が一韻の中に実在することがなく、多くの韻ではA類の一方だけが実在している。これも、滂母の下でA類の音聲的特徴が neutralize することと関連ある現象であろう。

(21) 牙喉音とは、見 𠂔 溪 𠂔 群 𠂔 疑 𠂔 影 𠂔 曉 𠂔 匣 𠂔 の諸母を指す。喻母三等(于母)は匣母に含める。羊母(喻母四等)𠂔は、通常は牙喉音に入れられるが、本稿ではその音聲学的性質により齒音に加える。

(22) 之韻は唇音音節を含まない。したがつて、唇音の場合にはその類別が問題とならなかつた。

(23) 韻母・類の表記で、例えば「脂上合A」とあるのは、「脂韻上声(すなわち旨韻)合口A類」の意味である。開・合の対立を内部に含まぬ韻についても、介音(𠂔)の有無にしたがつて開・合を記す。但し、唇を用いて調音される韻尾 /-iŋ・-uk・-m・-p/ に終る韻は、規則的に /-m/ を含むことがないので、開・合を記さない。

(24) 他に、直音上字を用いた反切が少数ある。また、A類上字・B類上字が直音反切に使われた例が少数ある。

(25) これら残巻の略称は「十韻彙編」ind. による。

(26) この増加反切がB類上字をとることの背景について

は、第七章58頁で説明する。

(27) 唇音の場合との量的な違いとして、牙喉音の場合にはA類反切・B類反切にA類上字・B類上類の各用いられる比率が、唇音の場合に比べかなり低いことが挙げられる。つまり、牙喉音のA類反切・B類反切では、圧倒的にC類上字が多く用いられているのである。この原因は、A・B・C三類の声母の音声的距離が、牙喉音では唇音よりも比較的近かつたためであろうと思う。なお、牙喉音の場合には、「匹」の如く特別な用法を示す上字はみられない。

(28) このうち反切(3)(4)については、上字が同じいことを「切三」にまで溯つて確かめよう。

(3)の上字を「刊本」が「於」に作るのは後の改変であろう。(5)の上字を広韻は「於」に作るが「王」「王二」は「應」に作る(王「および完本王韻がもと「虞」に作るのは「應」の誤まりとして校訂される)。なお註(44)参照。

(29) 「榮」を広韻は「雨」に作る。「雨」は虞韻上声、C類字である。「十韻彙編」では「王」「王二」しか見ることができないが、ともに「榮」となっており、また、龍宇純「英倫敦切韻殘卷校記」(集刊外編第四種下 1961 pp. 83-836)に載せられてゐるS. 6013殘卷も同様である。同殘卷は、内容体裁からみて王仁昫切韻に比べ更に原本に近い段階のものと見られる。これらより見て、「榮」の方

が原本切韻の用字であつた可能性が大きいと思われる。

(30) 舌歯音とは次のようなグループをなす声母の総称である。舌頭音…端 ㄊ 透 ㄊ 定 ㄊ 泥 ㄋ 舌上音…知 ㄔ 徹 ㄔ 澄 ㄔ 娘 ㄋ 半舌音…来 ㄌ 齒頭音…精 ㄑ 清 ㄑ 從 ㄑ 心 ㄑ 邪 ㄑ 正齒音一等…莊 ㄗ 初 ㄗ 崇 ㄗ 生 ㄗ 俟 ㄗ 正齒音三等…章 ㄗ 昌 ㄗ 船 ㄗ 書 ㄗ 常 ㄗ 半齒音…日 ㄗ 他に ㄗ 羊 ㄗ

(31) 舌齒音声母は、口蓋化の程度差によつて調音の変化しうる余地が小さい。そのため、AB類声母とC類声母の間にさしたる音声的差異がなく、反切上字の上でそれらを区別して扱かう必要がなかつたのであろう。

(32) 蒸職韻の場合にやや似たケースとして、元月韻の場合がある。切韻系韻書の韻の配列順において、元韻 /-ian, -iuan/ は寒桓韻 /-an, -uan/ の傍にはなく、痕魂韻 /-un, -uun/ の傍に並べられ(但し「王二」をのぞく)、また広韻の韻目表に附された同用例(唐初の奏定に係るという)でも、元韻は寒桓韻とではなく痕魂韻と同用が許されている。月韻についても事情は全くこれらと平行する。元月韻の場合も、蒸職韻の場合と同じく、押韻の基準が主母音の音韻的同一性よりも、むしろその音声的近似性にあつたことと例証と考えられる。

(33) 反切(4)の下字は、「王二」では「力」となっている。

しかし、広韻・唐韻・「刊本」みな「側」であり、S. 6013 残巻も同様であるから、「側」が原本切韻の用字を保存している可能性が大きい。職韻の小韻配列順を見ると、「側」が所属する「竣」小韻は他の正齒音二等小韻とは離れて、反切下字「通」をとる小韻のグループ（すなわち唇音と牙喉音合口の小韻）の中に配置されている。このような配置は、「通」小韻の反切下字がもともと「側」であつたことに由ると考えると、自然に理解することができるであろう。

- (34) 平声の唇音B類反切では、上字は殆どC類字が使われている（註(9)後半を参照）。幫母についていうと、B類上字をとる反切は上掲(1)の他には支韻「彼為」の一例があるのみである。(1)におけるB類上字の使用が偶然でないとする卑見は、同時にこのような例外性をも説明することとなる。

- (35) 以上述べた反切下字の具体的状況については、李栄「切韻音系」ibidの曾撰單音字表を参照されたい。

- (36) Etudes sur la phonologie chinoise, ibid. p. 647.

華訳本 p. 492

- (37) 「中古漢語の韻母の体系」ibid. p. 17

- (38) すなわち、舌上音や正齒音二等と二等韻は結合する。

これらの声母は、他には拗音韻母としか結合しない。

- (39) 中古音でも /w/ をもつ韻母が他にあつた可能性はあ

り、別途に考察を要する問題である。賴惟勤氏は、韻尾を立てることによつて佳韻を $\cdot ai$ 、支韻を $\cdot iei$ とあらわしておられる（漢字の中古の韻について「漢文教室」1956 pp. 1-8 第五表、訳註「離騷」江南書院訳註双書 東京 1958 p. 89 韻母表）。これらの $\cdot i$ は、上古 $\cdot e$ にあたる位置に設定された点で本稿の /w/ に相当する。

- (40) 陸志章「古音説略」燕京學報專号之一 北京 1947 pp. 52-53

- (41) 「切韻音系」ibid. 新版 p. 143

- (42) 「過渡的状況」とは、一方言内における兩語形の併存または自由な交替、或は、教養的發音と俗語的發音による違い、などを含むが、事実がその何れであつたかは知がたい。或はまた、敦煌毛詩音の反切じたいに新旧の二層があるのかも知れない。

- (43) 第三章参照。

- (44) さきの表三における反切(3)や(5)の蒸職韻上字が「刊本」や広韻で「於」（魚韻C類）になつているのは、蒸職韻牙喉音開口字がC類からB類に変化したため、これらC類反切に蒸職韻上字は調和しないと感ぜられたことに由る改変ではないか、と思われる。（註(28)参照。）

- (45) 拙稿「敦煌毛詩音殘卷反切の研究」。序論および資料を（上）として北海道大学文学部紀要 XIV-III 1966. 3 に発表

した。同論文の序論および資料「音注総表」「反切上字表」のうち蒸職韻に関連する部分を参照されたい。なお、以上に要約した考察において、S. 2729 残巻に関する点については、British Museum より東洋文庫に寄贈されたマイクロフィルムを資料として使用した。

- (46) 上古音の部の名称や音価は、董同龢「上古音韻表稿」集刊第十八本 1948 pp. 1-29 に従う。但し、幽部と中部の主母音は董氏によれば *o* 類の母音であるが、本稿では頼惟勤氏の説に従つて「上古中国語の喉音韻尾について」お茶の水女子大学人文科学紀要第3巻 1953 pp. 51-64、*ə* 類の母音とみなして音価を組みかえる。*ə* 類の主母音を含む部として他に緝陰部があるが、唇音字や牙喉音合口字を含まないで表には掲げない。なお、部名に附した「陰」は陰声（有声子音に終る音節）、「入」は入声（無声子音に終る音節）の略である。

- (47) 表八ノ一における幽入部 *ieu*、中部 *ieu* は董氏の音価 *iok*, *iong* を組みかえたものであるが、他の部との平行状態よりみて、これらの主母音は *e*（董氏の音価で *いえ* *ば* *o*）に改めるべきである。また、侵部 *iew* も *ian* に改めるべきであらう。ここでは仮に董氏の音価にならつておく。

- (48) 表九ノ二の蒸部 *iew* の主母音は *e* に改めるべきもの

である。

補注 (49頁)

清音韻が /-ien, -iek/ であることだけに頼つて、蒸職韻舌歯音の音価を /-ian, -iak/ と推定するのには、若干の不安が伴なうと言ふべきである。何故ならば、清音韻は庚陌韻（三等）と声母および A・B の類別に関して補い合う分布をなすので、庚陌韻と同じく /-ian, -iak/ と解釈されうる可能性があるからである。したがつて、蒸職韻舌歯音の音価が /-ian, -iak/ である根拠としては、むしろ第五章 53 頁に述べるように、蒸職韻舌歯音開口反切が蒸職韻牙喉音開口反切と反切下字を共通にすることを重視すべきであらう。

（校正に際して記す。）